

JSCR Newsletter



日本糖質学会会報
JSCR Newsletter published by
The Japanese Society of Carbohydrate Research

2021年度（第24回）日本糖質学会奨励賞 受賞者決定

日本糖質学会授賞選考委員 加藤 晃一
平林 淳

本年度第24回日本糖質学会奨励賞受賞者が決定されましたのでお知らせします。

この度は糖質学会会員の皆様から優れた候補者の推薦をいただきありがとうございました。選考委員の厳正な審査を経て、理事会にて下記の3名を受賞者として決定いたしました。

受賞者には心からお祝いを申し上げますとともに、今後の益々のご活躍を期待いたします。

なお、昨年の第39回年会（東京）が誌上開催となったことから、授賞式および受賞講演を今回第40回年会（鹿児島）にて合同で行う予定です。詳細が決まりましたらお知らせします。

奨励賞

小川 光貴（名古屋大学）

O-GlcNAc glycan の発見と分子機能・生物学的意義の解明

下山 敦史（大阪大学）

リピドAの化学合成が拓く細菌-宿主間ケミカルエコロジー

花松 久寿（北海道大学）

シアル酸結合様式特異的な化学修飾による構造異性体識別法の開発

(50音順、敬称略)

CONTENTS

■奨励賞 受賞者決定	加藤晃一・平林淳◎1	■「令和3年度日本糖質学会総会」開催のお知らせ ◎6
■第40回日本糖質学会年会	隅田泰生◎2	■小倉治夫先生を偲んで 高柳弘明・武田収功◎7
■第40回日本糖質学会年会特別講演者のプロフィール	◎4	■小倉治夫先生に感謝を込めて 北島健◎8
■寄稿	稲津敏行◎5	■理事会議事録 ◎9
		■理事・評議員・名誉会員・顧問・維持会員 ◎10

第40回日本糖質学会年会

1. 開催日および場所

開催日 2021年10月27日(水)～10月29日(金)(3日間)
開催場所 鹿児島県民交流センター
〒892-0816 鹿児島市山下町14番50号

2. 主催者および組織(代表者/連絡先)

主 催: 日本糖質学会
代表者: 第40回日本糖質学会年会組織委員長 隅田 泰生
鹿児島大学 大学院理工学研究科 工学専攻 化学生命工学プログラム

組織委員(50音順):

石橋 洋平(九州大学)	伊東 信(九州大学)
大坪 和明(熊本大学)	沖野 望(九州大学)
加藤 健太郎(長崎大学)	神田 大輔(九州大学)
角田 佳充(九州大学)	塩崎 一弘(鹿児島大学)
新地 浩之(事務局:鹿児島大学)	隅田 泰生(委員長:鹿児島大学)
竹川 薫(九州大学)	畠山 智充(長崎大学)
平井 剛(九州大学)	藤田 清貴(鹿児島大学)
三浦 佳子(九州大学)	若尾 雅広(事務局:鹿児島大学)

事務局: 若尾 雅広・新地 浩之・内野 るみ・宮田 裕子
鹿児島大学 大学院理工学研究科 工学専攻
化学生命工学プログラム 生体分子コンジュゲート部門(隅田研究室)内
〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元1-21-40
Tel/Fax: 099-285-8369
E-mail: sec-suda@cb.kagoshima-u.ac.jp

3. 共催または後援団体など(予定)

共 催 シアル酸研究会、シクロデキストリン学会、セルロース学会、日本栄養・食糧学会、日本応用糖質科学学会、日本化学会、日本キチン・キトサン学会、日本植物生理学会、日本神経科学学会、日本生化学会、日本生物工学会、日本生物物理学会、日本蛋白質科学会、日本分子生物学会、日本薬学会

協 賛 高分子学会、繊維学会、日本再生医療学会、日本食品科学工学会、日本膜学会、日本農芸化学会、有機合成化学協会、野口研究所

後 援 日本炎症・再生医学会、日本核磁気共鳴学会、日本癌学会、日本基礎老化学会、日本ケミカルバイオロジー学会、日本発生生物学会、日本免疫学会、日本脂質生化学会、鹿児島大学

4. 会議の目的:

殆ど全ての生物は、その細胞表面が糖質で覆われています。哺乳類においては、細胞表面のタンパク質と一部の脂質は糖質によって修飾されており、相互作用の場を提供します。また、血中タンパク質の殆どは糖タンパク質であり、糖質がその血中動態を決定します。このように、生命における糖鎖の重要性は想像を遙かに超えるものがあります。一方、生命における糖質の謎もいまだに数多く存在し、糖質の科学的ポテンシャルはきわめて大きいものです。日本糖質学会は、このような糖質や複合糖質の生物学・化学・インフォマティクス、それらを基盤にした医療、創薬、生物工学、材料化学、産業応用にいたる研究を包含しています。近年の本領域の進展はめざましく、糖鎖機能の解明、難病と糖鎖構造の関連の解明、新しい技術革新を目指す研究が益々活発に展開されています。

本年会では、糖質学会会員による新しい成果が一般演題として公表されるとともに、先端研究者による講演会をはじめとする特別企画が開催されてきました。また、本年会は数多くの大学院生や

博士研究員など若手研究者が目を輝かせて研究発表する場でもあり、とくに素晴らしい研究発表には優秀講演賞やポスター賞を授与することによって、将来の日本・世界の科学技術を背負う人材の育成にも力を注いできました。しかし、昨年の第39回年会は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、誌上開催とせざるを得なくなりました。未だに、新型コロナウイルスの感染が広がっておりますが、オリンピックが終わって2ヶ月後の10月末には、終息に向かっていると思われれます。そこで、本第40回年会は、「コロナ後の糖質研究：前へ！」という旗頭をたて、コロナ禍で世界が閉塞した状態から、糖質研究が先頭に立って研究・開発を活性化することを目的として開催いたします。発表者と評議員の皆様には、原則鹿児島に来ていただくことを想定しておりますが、加えてこの機会に糖質研究の裾野をさらに広げるために、対面での講演やポスターセッションをインターネットで同時中継するハイブリッド方式とすることにいたしました。例年、年会開催の時期は、台風シーズンも終わり、鹿児島では最も過ごしやすい気候が続く季節で、秋太郎（バショウカジキ）など旬の食材も多々あります。会員の皆様には、是非鹿児島へお越しいただき、最新の研究成果の討論や発表を通じて、糖質科学研究全般の発展へ貢献いただくとともに、研究者ネットワークを構築いただければ幸いです。

5. プログラム概要

【年会の構成】

①プログラム・セッション

口頭セッション（50件程度）、ポスターセッション（250件程度）、企業展示等招待講演、男女共同参画企画講演、受賞講演、優秀講演賞ファイナリスト講演インターネットで同時配信

②シンポジウム要旨集

講演およびポスター発表のプログラムと要旨集を作成

【主要題目】

糖質の化学、糖質の生物学、糖質の構造生物学、糖質の化学生物学、糖質の反応・計算化学、糖質の材料科学、グライコミクスと医療・産業応用

【日程表】

年会日程	午前	昼休み	午後
10月27日(水)	パラレル口頭発表、ポスターセッション	企業プレゼンテーション	ポスターセッション（ショートスピーチ）、口頭発表
10月28日(木)	パラレル口頭発表、ポスターセッション	企業プレゼンテーション	受賞講演、男女共同参画企画、招待講演、ポスターセッション
10月29日(金)	パラレル口頭発表、ポスターセッション	企業プレゼンテーション	ポスターセッション（ショートスピーチ）、口頭発表

【発表申込】

発表申し込み期間は、2021年7月12日から8月10日までを予定しております。準備ができ次第、皆様には糖質学会のホームページの年会専用ページ (<http://www.jscr.gr.jp/?p=contents&id=34>) および、評議員のML等でお知らせいたします。

6. 参加登録料： < >内は2021年9月15日以降申込の金額です。

日本糖質学会正会員：7,000円 <9,000円>

日本糖質学会学生会員：2,000円 <4,000円>

一般：9,000円 <11,000円>

一般学生：3,500円 <4,000円>

ただし、共催・協賛・後援の学会の規程で、日本糖質学会員と同額の参加登録料で参加できる規程がある場合は、会員の登録料で取り扱います。

7. 託児室について

会期中、会場内に託児室を用意いたします。委託時間・利用料等の問い合わせ、利用申し込み

の詳細については、学会ホームページの年会専用ページでお知らせします。

8. 懇親会について

野外で行うことも含めて検討しましたが、現段階では、今回は見送らざるを得なくなりました。ただし、状況が許せば、短時間のミキサーを会場前の公園等で行うことも考えており、直前になるかもしれませんが、年会専用ページでお知らせします。

第40回日本糖質学会年会 特別講演者のプロフィール

門松 健治(かどまつ けんじ)先生 (名古屋大学大学院医学系研究科教授)

門松先生は、1982年九州大学医学部ご卒業後、小児外科に入局され、その後鹿児島大学医学部生化学講座助手、NIH 客員研究員、1993年10月名古屋大学医学部生化学講座助手、2004年9月から名古屋大学大学院医学系研究科生物化学講座教授を務められています。また、2017年より同大学院医学系研究科長・医学部長、そして2019年より日本糖質学会会長を務めておられます。

先生が医師として最初に出会われた疾患は小児外科での神経芽腫でした。この小児がんの克服を目標として、基礎医学研究の道へ進まれ、村松喬教授(元日本生化学会会長、名古屋大学名誉教授)のご指導を受けられました。大学院生時代に発見されたヘパリン結合性成長因子ミッドカインのがん、神経、炎症などへの関与についてのご研究を展開され、その後神経糖鎖生物学に研究の中心を移され、この分野の進展に尽力してこられました。その成果の一つとして、新学術領域「神経糖鎖生物学」を領域代表として運営(2011-2015年度)され、多くの若手研究者を育成・サポートされました。さらに統合的生命科学を目指す基盤形成のために、文部科学省ロードマップ2020に「ヒューマングライコームプロジェクト」を代表として提案され、採択に至られました。本講演では、今年度から本格始動する「ヒューマングライコームプロジェクト」を骨格に、糖質科学の将来を議論いただきます。

気になること

東海大学 稲津敏行

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、昨年から多くの学会活動にリモート方式が採用されている。学会員が年に一度一堂に会し、最新の研究発表に耳を傾け、顔をつきあわせて情報交換する。懇親会では、アルコールの力も借りて、さらに深い話ができる。この当たり前ができなくなっていることに、研究室をどのように閉じようかと思案する者でさえ、研究の活性化や継続性などに危惧を抱いてしまう。

ところで昨年度、お茶の水女子大の小川温子先生と共同で御世話させて頂いた第39回日本糖質学会年会は、会員の皆様のお力添えを頂き、誌上開催という史上初の形で無事に終えることができた。準備活動のほとんどは、事務局の相川京子先生、眞鍋史乃先生や世話人会の先生方にお任せであったが、昨年4、5月頃どのように開催するかという方向を決めるときには相当腐心したことを思い出す。ちょうど、各大学が苦勞の末に遠隔授業に突入したものの、インターネットの回線状況がパンク続きであった。学会をリモートで行うことができるのか、どのように開催できるのか、通信状況が悪くなった場合に主催者は参加者にどのように責任をとるのか、様々な未経験の疑問が生じた。この1年間でリモート会議等の環境は大きく変貌し、今となってみれば、その多くは取り越し苦勞であったとも思える。結局、開催中止という苦渋の決断を下した。その後、門松健治会長はじめ理事会のご指導で誌上開催という形で行うこととなった。結果的には、年会開催の歴史に穴を空けなかったと安堵している。

社会インフラとも言えるリモート環境は、アフターコロナにおけるスタンダードになると思われる。授業や会議などの大学の活動の多くも、リモートが当たり前になっている。この新しい時代における学会活動はどう変化するべきか、コロナ禍の今だからこそ議論すべき課題であろう。

ところで、筆者自身が日本糖質学会年会に初めて参加したのは、野口研究所に採用された翌年の1983年8月に松田和雄先生が御世話された第6回炭水化物研究会年会（仙台）を聴講したときである。糖科学のバックグラウンドや糖の研究経験は何もなく、糖残基の省略記号もあやふやで、内容はほとんどわからなかったことを今でもよく覚えている。右も左もよくわからないまま、その会で、楠本正一先生と名刺交換させて頂いた。これが、本学会での活動の第一歩であった。

その6年後の1989年7月に大阪で開催された第12回日本糖質学会年会（三崎旭先生代表世話人）で、共同研究者の山ノ井孝先生が糖ジメチルホスフィンチオエートを用いるグリコシル化反応をまとめて発表した。座長の橋本弘信先生から「この方法も市民権を得てきた」とのコメントを頂いた。その言葉を

伺った時に、はじめてこのコミュニティのメンバーとしてやっていけそうだという思いを抱くことができた。また、本学会を通じ多くの内外の研究者との出会いが生まれ、その先生方にご指導ご支援を頂いた。そのお陰で何とか



このコミュニティで活動を続けることができた訳で、諸先生方に感謝申し上げたい。

筆者は、研究分野は何ですか？と問われると閉口してしまう。有機合成化学という武器を使って、面白そうなことには分野を問わず何でも挑戦してきた。野口研当時の共同研究者とは、何もないところから「何しろやってみよう」という心意気だけで突き進んだ。東海大では、研究スピードは低下したものの、人材育成という新たな喜びを感じながら、総合大学の利点を生かした共同研究をも展開した。現在の研究室のテーマには、ウランのフルオラス抽出も掲げている。結局、常に気になることに挑戦し続け、何とか仕事を続けることができたと思ってしまう。

先日、作詞家伊藤アキラ氏の訃報が流れた。追うように作曲家小林亜星氏もこの世を去った。誰もが口ずさめるだろうコマーシャルソング『日立の樹』も彼らの作品である。その2番は次のようである。

『2. この木なんの木 気になる木

見たこともない木ですから

見たことのない花を咲かすでしょう』

（「日立の樹」伊藤アキラ作詞、小林亜星作曲より引用）

研究に、業績の量や実用化を求めることがある。これを否定する気は毛頭無い。しかし、ブームに乗る必要もない。新型コロナウイルス感染症の終息の鍵として期待されるワクチンの製造には、長い間余り注目されなかった mRNA に関する基礎研究が貢献していると聞く。

次世代を担う若い研究者には、何だかよくわからないが面白そうなこと、何だか気になること、そんな自分自身が気になる基礎研究を大切に頂きたい。気になる研究をゆっくりでも大きく育てあげ、見たこともない大きな花を咲かせて欲しいと願う今日この頃である。

「令和3年度日本糖質学会 総会」開催のお知らせ

会員各位

日 本 糖 質 学 会
会 長 門 松 健 治

昨年度の日本糖質学会総会は COVID-19 の影響によりメール会議といたしました。本年度の日本糖質学会年会は講演等をインターネットで同時中継するハイブリッド方式として開催されますので、総会もメール会議とさせていただきます。開催時期は9月中を予定しており、後日詳細をご連絡申し上げます。

小倉治夫先生を偲んで

北里大学元教授 高柳弘明
 横浜薬科大学元教授 武田収功

北里大学名誉教授 小倉治夫先生が、令和2年10月14日、92歳の生涯を終えられました。お亡くなりになる数週間前にお電話させていただいたときには、いつもの元気なお声がやや薄れ、夏の疲れでも出ているのかと思っておりましたので、訃報に接しました時には言葉を失わざるを得ませんでした。

小倉治夫先生は、昭和3年1月1日に東京都千代田区九段でお生まれになり、昭和27年東京大学医学部薬学科、薬化学教室落合英二教授の下で卒業研究を終えられました。卒業後は、国立衛生試験所の助手、慶應大学薬化学研究所講師を経たのち、昭和36年にはフルブライト留学生としてコーネル大学化学科マインワルド教授の下に博士研究員として留学されました。翌年帰国後、北里大学薬学部発足と同時に教授に就任され、平成5年に定年退職を迎えられるまで、28年間薬学部薬化学教室を主宰され多くの人材を育成してこられました。先生の教育・研究方針は、常に学生・室員の自主性を尊重する研究指導方針でありました。

昭和37年教授就任当時、研究室のある建物は建設中で、北里研究所所長、秦藤樹教授の研究室を間借りし、秦教授の発見されたマクロライド抗生物質ロイコマイシン（キタサマイシン）の構造解析を、後の研究所所長、大村智教授とともに行ったと伺っておりました。NMR測定もままならない時代、大変なご苦労だったようです。やがて、新築の研究室に移り、本格的に始めた研究が天然有機化合物の構造解析です。研究の中心はラクタム化合物の配座解析で、X線結晶解析による絶対構造と円二色性（CD）のコットン効果曲線との規則性を見出し、量子化学計算によりその根拠を明らかにしたものでした。この結果はCDの「ラクタム則」として発表し、現在もラクタム環の配座解析に利用されております。その後、研究テーマはヌクレオチドの簡易合成法、ペプチド合成試薬、炭素-炭素結合形成反応の開発に発展し、多くの業績を残されました。昭和50年ころになると、シアル酸をリード化合物とした糖鎖合成研究が始まりました。N-アセチルノイラミン酸（シアル酸）の詳細な性質等を知る必要から、横浜中華街の中華食材店で燕の巣（燕窩）を購入し、希硫酸で加水分解しシアル酸を得るところから研究が始まりました。研究は、シアル酸のアノマー位の平衡状態での立体化学の分子論の研究からスタートし、グリコシル化試薬開発、天然のシアル酸誘導体合成などを行っておりました。

先生は生命活動におけるシアル酸の重要性を認識され、シアル酸糖鎖研究の第一人者であります山川

民夫先生を会長として1980年シアル酸研究会を創設なさいました。小倉先生は会の事務局長としてシアル酸化学の発展をサポートしてこられました。シアル酸研究会は勉強会として発足、多くの研究者の参加を得て発展し、1985年にはポール



ソン教授とシャウアー教授をお招きし東京で国際会議を、翌1986年、引き続き東京で国際会議を行いました。この会議では内外の出席者は440名を数え、シアル酸研究会始まって以来の盛況となりました。更に1988年にはベルリンの日独センター（旧日本大使館）で、山川先生をはじめとする日本の学者や研究者、またシャウアー教授を中心とするドイツの学者、研究者らとの会議を開催しました。この会議は4日間に亘り学術的水準の高い歴史的なものでありました。その後、シアル酸研究会は2003年、第22回シアル酸研究会から日本糖質学会の共催研究会として参画することになりました。以後、共催研究会としてシアル酸研究会は、日本糖質学会ポスター賞をはじめ、国内外の種々の糖質関係の学術集会后援する活動を続けるとともに、日本糖鎖科学コンソーシアムの谷口直之前本会会長のご協力により2015年には「山川民夫賞」の創設に貢献しました。「学会に出席すると新しい発見がある。科学は日進月歩だなあ」と小倉先生はシアル酸研究の発展を心からお喜びになっていらっしゃいました。この陰には小倉先生の献身的努力があったものと思います。

先生は、学内では薬用植物園長などを、また薬学会評議員をはじめとする国内外の幾多の学会での重責を担い、またその親しみやすいお人柄は多くの諸先輩、ご友人、卒業生に慕われておりました。先生は池波正太郎の小説がお好きで、小説に出てくる蕎麦のお店をよく食べ歩きをなさっていました。奥様とのご旅行を何より楽しみにされ、どこに行かれても一緒に蕎麦の名店を探し歩いておられるのを思い出します。

永年にわたり、研究・教育に果たされたご功績に深く感謝し、ご冥福を心からお祈りいたします。小倉治夫先生、ありがとうございました。

小倉治夫先生に感謝を込めて

名古屋大学糖鎖生命コア研究所 北島 健

本会名誉会員の小倉治夫先生のご逝去は、あまりにも急なことでただただ驚くばかりです。小倉先生は1980年、同じく本会名誉会員であられた山川民夫先生(2018年ご逝去)とともにシアル酸研究会を立ち上げられ、以来、2016年まで事務局長として研究会を率いて来られました。その間、シアル酸研究会を通じて、シアル酸研究を中心テーマにした国際学会4回、国内学会22回を開催され、糖鎖研究の発展に大きく貢献されました。本会との関係においては、北里大学薬学部教授としてだけでなく、名誉会員としても、毎年欠かさずに年會に参加され会を盛り上げてくださいました。また、シアル酸研究会事務局長として、2003年から毎年、年會への多額な寄付と若手奨励を目的とするポスター賞副賞のご提供を継続して下さいました。その恩恵にあずかったポスター賞受賞者はこれまでに69名に及びます。その中にはその後、奨励賞を受賞したり、評議員として活躍したりする人が数多くおられます。先生の長期にわたる本会へのご理解とご支援は、本会の運営と糖質科学の発展に対する不滅のご貢献として永く我々の記憶に留まることと思います。その恩恵にあずかった会員のひとりとして、先生には深く感謝申し上げます。

今回92歳というご年齢を改めてお聞きして、先生が年齢とはかけ離れたバイタリティーの持ち主でいらっしやったことを今更ながら感じております。個人的には2002年からシアル酸研究会の事業委員にお誘いいただき、以来、最近まで研究に関するいろ

いろな議論をさせていただきました。例えば、「ウシの唾液のシアル酸が育毛効果をもつという記事を読んだけど、それはどういう機構で起こるのか？」というような質問をいただいたことがありました。この現象は未だちゃんと証明されていないと思いますが、シアル酸の生理機能へのご興味の深さを感じました。また、90歳も間近という2017年3月には、「最近、様々な雑誌などで図としてシアル酸の単糖構造を提示する時に、 α アノマーとして誤表記される場合が散見される」ことを指摘され、糖質研究者コミュニティに対する注意喚起を要望されたことがありました。その時には、山川民夫先生、鈴木邦彦先生、小川智也先生からのご助言によって、その年の本会ニュースレターに「シアル酸の立体化学」という論文を書いていただくことになり、その年の12月号に掲載されました。複合糖質上のシアル酸グリコシドは全て α アノマーであるのに対して、遊離シアル酸では大きく β アノマーに偏っていることを歴史的な文献を引用しつつまとめられました。縁あって、その記事の編集をお手伝いできましたことは、シアル酸研究に携わる者として光栄に思っております。その後もシアル酸の構造を目にしたり、描いたりするたびに、先生がきっぱりとした口調でありながらも暖かく論しておられるお姿が思い浮かべられます。

小倉先生の長年にわたる本会へのご貢献と、若い世代へのご指導およびご支援に深謝し、心よりご冥福をお祈りいたします。

令和3年度役員(任期 2021. 7. 1～2022. 6. 30)

理事 安藤 弘宗

石田 秀治

梶原 康宏

加藤 晃一

蟹江 治

北島 健

佐藤 ちひろ

鈴木 匡

平林 淳

藤本ゆかり

本家 孝一

監事 門松 健治

深瀬 浩一

梶本 哲也 立命館大学薬学部

梶原 康宏 大阪大学大学院理学研究科

片山 高嶺 京都大学大学院生命科学研究所

加藤 敦 富山大学附属病院薬剤部

加藤 啓子 京都産業大学生命科学部

加藤 晃一 自然科学研究機構生命創成探究センター

門松 健治 名古屋大学糖鎖生命コア研究所・大学院医学系研究科

金川 基 愛媛大学大学院医学系研究科

金森 審子 東海大学工学部

蟹江 治 東海大学工学部

鎌田 佳宏 大阪大学大学院医学系研究科

亀井 加恵子 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科

亀山 昭彦 産業技術総合研究所創薬基盤研究部門

川崎 ナナ 横浜市立大学大学院生命医科学研究科

川島 博人 千葉大学大学院薬学研究科

北岡 本光 新潟大学農学部

北川 裕之 神戸薬科大学薬学部

北島 健 名古屋大学糖鎖生命コア研究所・生物機能開発利用研究センター

北爪しのぶ 福島県立医科大学保健科学部

木塚 康彦 岐阜大学糖鎖生命コア研究所

木下 聖子 創価大学糖鎖生命システム融合研究所・理工学部

木村 吉伸 岡山大学大学院環境生命科学研究科

顧 建国 東北医科薬科大学分子生体膜研究所

神田 大輔 九州大学生体防御医学研究所

小島 直也 東海大学工学部

近藤 昭宏 株式会社日吉

佐藤 あやの 岡山大学工学部

佐藤 武史 長岡技術科学大学生物系

佐藤 ちひろ 名古屋大学糖鎖生命コア研究所・大学院生命農学研究科

佐藤 智典 慶應義塾大学理工学部

篠原 康郎 金城学院大学薬学部

島本 啓子 公益財団法人 サントリー生命科学財団

清水 史郎 慶應義塾大学理工学部応用化学科

清水 弘樹 産業技術総合研究所細胞分子工学研究部門

須貝 威 慶應義塾大学薬学部

鈴木 匡 理化学研究所開拓研究本部

隅田 泰生 鹿児島大学大学院理工学研究科

鷹野 景子 東京家政学院大学

高橋 素子 札幌医科大学医学部

竹内 英之 静岡県立大学薬学部・大学院薬学研究院

竹川 薫 九州大学大学院農学研究院

武田 陽一 立命館大学生命科学部

竹松 弘 藤田医科大学医療科学部

評議員 (任期 2021. 7. 1～2022. 6. 30)

相川 京子 お茶の水女子大学基幹研究院自然科学系

赤井 昭二 女子栄養大学応用有機化学研究室

秋吉 一成 京都大学大学院工学研究科

芦田 久 近畿大学生物理工学部

天野 純子 (公財)野口研究所糖鎖生物学研究室

荒田洋一郎 帝京大学薬学部

安藤 弘宗 岐阜大学糖鎖生命コア研究所

池田 義孝 佐賀大学医学部

池原 譲 千葉大学大学院医学研究院・腫瘍病理学

石田 秀治 岐阜大学糖鎖生命コア研究所・応用生物科学部・生命の鎖統合研究センター

石水 毅 立命館大学生命科学部

和泉 雅之 高知大学教育研究部

板野 直樹 京都産業大学生命科学部

一柳 剛 鳥取大学農学部

伊藤 孝司 徳島大学大学院医歯薬学研究所

糸乗 前 滋賀大学教育学部

井原 義人 和歌山県立医科大学医学部

岩渕 和久 順天堂大学大学院医療看護学研究科

上村 和秀 中部大学生命健康科学部

浦島 匡 帯広畜産大学畜産学部

大谷 克城 酪農学園大学農食環境学群

大坪 和明 熊本大学大学院生命科学研究部

大橋 貴生 摂南大学理工学部生命科学科

岡 昌吾 京都大学大学院医学研究科

岡島 徹也 名古屋大学糖鎖生命コア研究所・大学院医学系研究科

越智 里香 高知大学教育研究部

柿崎 育子 弘前大学大学院医学研究科

角田 佳充 九州大学大学院農学研究院

笠原 浩二 東京都医学総合研究所

舘野 浩章 産業技術総合研究所糖鎖医工学研究センター
 田中 克典 理化学研究所開拓研究本部
 田中 浩士 東京工業大学物質理工学院
 田村 純一 鳥取大学農学部
 千葉 靖典 産業技術総合研究所生命工学領域研究戦略部
 梅谷内 晶 創価大学糖鎖生命システム融合研究所・理工学研究科
 戸嶋 一敦 慶應義塾大学理工学部
 戸谷希一郎 成蹊大学理工学部
 豊田 英尚 立命館大学薬学部
 豊田 雅士 東京都健康長寿医療センター研究所
 中川 優 名古屋大学糖鎖生命コア研究所
 中北 慎一 香川大学総合生命科学研究センター
 中野 博文 愛知教育大学自然科学系化学
 中山 淳 信州大学医学部
 長束 俊治 新潟大学理学部
 西河 淳 東京農工大学大学院農学研究院
 西島 謙一 名古屋大学生命農学研究科
 西田 芳弘 千葉大学大学院園芸研究科・応用生命化学領域
 西村紳一郎 北海道大学大学院先端生命科学学院
 野上 敏材 鳥取大学大学院工学研究科
 羽田 紀康 東京理科大学薬学部
 花島 慎弥 大阪大学大学院理学研究科
 原田陽一郎 大阪国際がんセンター研究所
 東 伸昭 星薬科大学薬学部
 比能 洋 北海道大学大学院先端生命科学研究院
 平井 剛 九州大学大学院薬学研究院
 平林 淳 名古屋大学糖鎖生命コア研究所
 深瀬 浩一 大阪大学大学院理学研究科
 伏信 進矢 東京大学大学院農学生命科学研究科
 藤本ゆかり 慶應義塾大学理工学部
 藤山 和仁 大阪大学生物工学国際交流センター
 古川 圭子 中部大学生命健康科学部
 古川 潤一 北海道大学大学院医学研究院
 北條 裕信 大阪大学蛋白質研究所
 保坂 善真 鳥取大学農学部
 細野 雅祐 東北医科薬科大学分子生体膜研究所
 本家 孝一 高知大学医学部
 松尾 一郎 群馬大学大学院理工学府
 松岡 浩司 埼玉大学大学院理工学研究科
 松野 健治 大阪大学大学院理学研究科
 眞鍋 史乃 星薬科大学薬学部
 萬谷 博 東京都健康長寿医療センター研究所
 三浦 佳子 九州大学大学院工学研究院
 水野 真盛 (公財)野口研究所糖鎖有機化学研究室
 三苫 純也 九州保健福祉大学生命医科学部
 宮西 伸光 東洋大学食環境科学部

三善 英知 大阪大学大学院医学系研究科
 門出 健次 北海道大学大学院先端生命科学研究院
 矢部 富雄 岐阜大学応用生物科学部
 山口 拓実 北陸先端科学技術大学院大学
 山口 真範 和歌山大学教育学部
 山口 芳樹 東北医科薬科大学分子生体膜研究所
 山田 修平 名城大学薬学部・病態生化学研究室
 山地 俊之 国立感染症研究所細胞化学部
 山ノ井 孝 城西大学薬学部
 山本 一夫 東京大学大学院新領域創成科学研究科
 湯浅 英哉 東京工業大学大学院生命理工学研究科
 横山 三紀 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科
 渡辺 秀人 愛知医科大学分子医科学研究所

名誉会員

池中 徳治	石戸 良治	伊東 信
伊藤 幸成	稲津 敏行	遠藤 玉夫
小川 智也	笠井 献一	川寄 敏祐
木曾 真	木下 タロウ	木全 弘治
楠本 正一	木幡 陽	鈴木 明身
鈴木 邦彦	鈴木 茂生	鈴木 康夫
谷口 直之	成松 久	西原 祥子
橋本 弘信	長谷 純宏	古川 鋼一
村松 喬	山形 達也	山本 憲二

顧問

一島 英治

維持会員

協和発酵キリン (株)
 (一財) 杉山産業化学研究所
 (株) スティックスバイオテック
 住友ベークライト (株)
 生化学工業 (株)
 DSP 五協フード&ケミカル (株)
 東京化成工業 (株)
 長良サイエンス (株)
 (公財) 野口研究所
 (株) 伏見製薬所
 松谷化学工業 (株)
 (株) ヤクルト
 理研ビタミン (株)

JSCR Newsletter (日本糖質学会会報) Vol. 25, No. 1

2021年6月25日 発行

編集兼発行 日本糖質学会

会長 門松 健治

〒103-0014 中央区日本橋蛸殻町1-38-12

油商会館3F

TEL: 03-5642-3700

FAX: 03-5642-3714

JSCR Newsletter 編集委員会

石田 秀治

本家 孝一